

発話者の心的態度からみた助詞 「は」と「が」の使い分け

柏崎 秀子*

THE USAGE OF JAPANESE PARTICLES "WA" AND "GA" BASED ON SPEAKER'S ATTITUDE OF MIND

Hideko KASHIWAZAKI

The purpose of this study was to examine the usage of Japanese particles "wa" and "ga" based on speaker's attitude of mind. To consider the education of Japanese for foreigners, hypotheses were built up pragmatically; a speaker used "wa" to lay emphasis on the following part of a sentence which particles divide, and "ga" to emphasize the preceding phrase. It was opposed to given-new information hypothesis. The first study investigated the different usages of "wa" and "ga" on the first sentences appearing in newspapers. The results showed that "wa" was much used in economic pages as "ga" was rather used in social ones. It suggested that the different usages of "wa" and "ga" were related to a writer's different attitude of mind. The second study investigated different usages by undergraduates when asked to select appropriate particles in given sentences and to write their reasons why they selected them. It suggested that the selection of the particles depended on how to lay emphasis rather than on given-new information.

Key words; speaker's attitude of mind, Japanese particles "wa" and "ga", lay emphasis, pragmatics, given-new information.

問 題

言語表現というものは、単に客観的な事態を写し取ってその論理関係を表示するばかりではない。論理関係の表示が必須の機能ではあるけれども、それ以外の機能も言語表現にはあることを見逃してはならない。すなわち、言語表現の主体者がどのような心的態度**を持っているか、ということを表わす機能である。言語表現の中にはその表現の主体者の意図や心情などが含まれているのである。これら論理面と心理面との両者の理解がなされてこそ、言語の深い理解が可能となる。この観点に立って、文法を捉える際にも論理的側面に加えて心理的側面をも取り扱う(川本, 1976) べきだと思われる。

ところで、近年日本語を学ぶ外国人の数が飛躍的に増大しており、彼らは学習の際に母国語との違いによって

様々な難題に直面すると思われる。文法に関しては、助詞「は」と「が」の使い分けが困難な事項のひとつとして挙げられよう。助詞「は」と「が」の使い分けについては古くから国語学や言語学の分野で諸説が出されているが、未だに統一の見解に至っていない。また、それらは複雑な文法用語による説明が多いため、日本語教育における学習指導には活用しにくいであろう(予想1)。たとえば、係助詞「は」と格助詞「が」の違いとする説明がみられるが、品詞分類上の問題であって実践的ではない。そこで、上述した文法を捉えるもうひとつの側面、すなわち発話者がどのような心情や意図で表現を用いるかという心的態度に着目して助詞「は」と「が」の使い分けを試みたい。

本研究では、日本語の文法において問題とされ、かつ、外国人日本語学習者に困難といわれる助詞「は」と「が」の使い分けについて探り、発話者の心的態度に基づいた使い分けルールの定式化を行うことを目的とする。

これまでの「は」と「が」の使い分け諸説を概括すると次のようにまとめられよう。まず、「は」は文の題目

* お茶の水女子大学人間文化研究科 (Doctoral Research Course in Human Culture, Ochanomizu University)

** ここで心的態度とは心情や意図によって何に重点を置くのか、を意味するものとする。川本(1976)は心理的姿勢と呼んでいる。

提示として排他的・強調的な取り立ての性質を持ち、「が」は単に叙述の主体を提示する性質をもつ、とする説(松下, 1930; 佐久間, 1940; 三尾, 1948)があげられる。だが、「私『は』学校へ行く」という文と「私『が』学校へ行く」という文を比較するならば、後文の方が、他の人ではなく私こそが行くのだ、と感じられるのではないか。したがって、かえって「が」の文の方が強く取り立てを感じるのではあるまいか(予想2)。

さらに、助詞が承ける語に関して「は」は既知・「が」は未知の語を承ける、とする説(松下, 1930; 松村, 1942; 大野, 1978)もみられる。すなわち、既に言及されている語を承げるのか、これから初めて言及する語を承げるのか、の違いによる説である。だが、たとえば「太郎と花子と和夫の3人のうちで、太郎が一番年上だ」の文では、先に太郎の名を出してあるので既知のはずだが、「太郎『が』」と表現されている。一方、小説では書き出しであるにもかかわらず、主人公を「は」で承ける場合も多い。はたして、「は」は既知の語に、「が」は未知の語にのみ限定的に付くのであろうか(予想3)。

また、言語学の立場から久野(1973)は機能論的な説と情報構造的な説を提示した。このことによって、文法術語による説明だけでなく現実の言語行動に注目して捉える見方が盛んになり始めた。久野はまず機能論から「は」には主題と対照の2機能、「が」には中立叙述・総記・目的格の3機能があることを指摘した。さらに、情報構造的な構文分析の観点すなわち新旧情報の観点からも述べており、「が」は新しいインフォメーションを表わすことをマークする標識との説も立てている*。井上(1983)は久野の機能論と情報構造的見解とを統合して談話文法を導いたが、その際、「は」を旧情報のマーカー・「が」を新情報のマーカーと捉えた。Chafe(1970)にも「は」が古い情報を、「が」が新しい情報を反映する、との定義がある。それらをふまえて、心理学の分野でも新旧情報に基づいて「は」と「が」の使い分けを発達的に検討している(林部, 1979; 田原・伊藤, 1985)。

新旧情報の定義は様々であるが、狭義に捉えて既出・初出とするならば、予想3と同様の批判がなされ得る。さらに、話し手・聞き手の共通意識内にある情報か否かと捉えたとしても次のような反例があげられよう。すなわち、たとえば「今泣いたカラス『が』もう笑った」の文において「今泣いたカラス」は話し手・聞き手両者とも承知している対象であるにもかかわらず、新情報とし

て「が」で承けている。したがって、「は」は既知・旧情報、「が」は未知・新情報だけを承けるとは言えないのではあるまいか(予想4)。

以上の研究史から、次のように予想がまとめられる。

- 予想1 文法術語中心の説明では日本語教育に活用的ではない
- 予想2 「は」は取り立て・「が」は単なる叙述とする説に対する疑問
- 予想3 「は」は既知・「が」は未知の語のみを限定的に承けるのではない
- 予想4 「は」は旧情報・「が」は新情報だけを承けるのではない

これらの予想を包括し得るような実践的な語用論的観点から発話者の心的態度に基づいた使い分けルールを考えてみた。

仮説

表現とその使用者(発話者)の関係という語用論、すなわち、発話者がどのような意図でその表現を選択するかを重んじる観点から仮説を立てた。発話者が何に力点を置いて話したいか、という心的態度による説である。なお、ここで「力点を置く」とは、発話者が強く述べたい、ということを表わす。

もし、「A + {は or が} + B」の形の表現があるとする、その発話者がB部分すなわちある語句・事柄についてどのようであるかを述べる部分に力点を置くのであれば、助詞「は」が使われる(仮説1)。同様に、発話者がA部分すなわちある語句・事柄を話題の場に取り出すこと自体に力点を置くのであれば、助詞「が」

が使われる(仮説2)。

この仮説を検証すべく、既存文の分析調査と実験的研究を行うこととする。

調査

目的

既存の文章では助詞「は」と「が」はどのように使われているのであろうか。助詞「は」と「が」の使い分け仮説を検証すべく、既存の文章として新聞記事の冒頭文**

* 「は」については「が」の対比で古いインフォメーションを表わすとはせず、むしろ、「は」を旧情報とする Chafe を批判している。

** ここで冒頭文を対象にするのは永野(1970)による。すなわち、文章における冒頭文は第2文以下とは違った特別な任務を持ち、その文章がいかに展開するかの大体の方向と輪郭を予想させ得る、からである。

を対象に、紙面による報道の立場や態度の違いが助詞「は」と「が」の使用頻度差に表われていないか調べることにする。

方法

〈材料〉新聞紙面の報道の立場において、より専門的な経済面とより大衆的な社会面とに相当するすべての記事の冒頭文とする。三大新聞（X新聞・Y新聞・Z新聞）の1984年10月31日付朝刊を用いる。なお、各新聞の経済面と社会面に相当する紙面を TABLE 2 に示す。

TABLE 2 各新聞の紙面の割当て

新聞名 紙面	X新聞	Y新聞	Z新聞
経済面	8・9面	6・7面	8・9面
社会面	22・23面	22・23面	22・23面

〈手続・分析基準〉経済面と社会面におけるすべての冒頭文について、「は」文か、「が」文かのいずれであるか調べた。ここで、

- { 「は」文とは冒頭文の形式が「AはB」
- { 「が」文とは冒頭文の形式が「AがB」

の場合である。冒頭文は記事の書き出しから最初の読点(。)までとした。

「は」文・「が」文のいずれにも入らないものは“その他”とした。“その他”の決め方の一部は永野にしたがった。すなわち、引用文や括弧でくくられた文で始まる場合や、「何々が発表した何々によると、何々は——」の形式がそれである。「は」も「が」も使われていなければ当然“その他”に入る。

「は」と「が」の両方が含まれる文の場合は原則として文末表現と呼応する方を採った。ただし、二重主語として議論されるような「象は鼻が長い*」の形式に相当する文は“その他”に数えた。重文において「は」と「は」「が」の両方が含まれる場合は各々0.5個として扱った。文・「が」文の例を TABLE 3 に示す。

結果

(1)数量的分析

先に述べた分析基準に従って、新聞記事の経済面・社会面の全冒頭文についてX新聞・Y新聞・Z新聞の三紙別に「は」文・「が」文・“その他”のいずれかに分類した結果を TABLE 4 に示す。三紙それぞれの傾向が同じであったので、三紙をまとめた「は」文・「が」文・“その他”の分類結果を FIG. 1 に示す。

* 日本語における主語を認定する際、「～は」「～が」を一括して主語とみなす文法理論が主流だが、三上(1960)はそれを強く否定し主語廃止論を唱えて、この文を書名に冠した著作を発表した。以来、この文は二重主語を表わす代表例文となった。

TABLE 3 紙面別の「は」文・「が」文の例

分類	例文
経済面	「は」文 証券界は、30日、長期金利の引き下げに合わせて国内の転換社債と事業債の利率を0.3%引き下げることを決めた（Y新聞）。
	「が」文 天井・壁・床からイスまですべて自社の絹製という豪華さで知られていた鐘紡の貴賓室が、4年ぶりに大阪市都島区の同社本部の一角に復元された（Z新聞）。
社会面	「は」文 政府は30日、わが国の野球技術の向上と日米友好親善の増進に寄与したとして、ボウイー・キューン前米国野球コミッショナーに勲二等瑞宝章を授与することを発表した（Y新聞）。
	「が」文 横浜ニュータウンの住宅都市整備公団工事区域内の谷間にある湿地帯から、約3000年前の縄文時代後期のものと見られる丸太の列が見つかった（X新聞）。

TABLE 4 各紙別の新聞冒頭文における「は」「が」の使われ方

新聞	経済面				社会面				計
	「は」文	「が」文	その他	小計	「は」文	「が」文	その他	小計	
X新聞	22	7	4	33	6	17	2	25	58
Y新聞	26	2	3	31	8	19	1	28	59
Z新聞	19	10	3	32	6	14	1	21	53
計	67	19	10	96	20	50	4	74	170

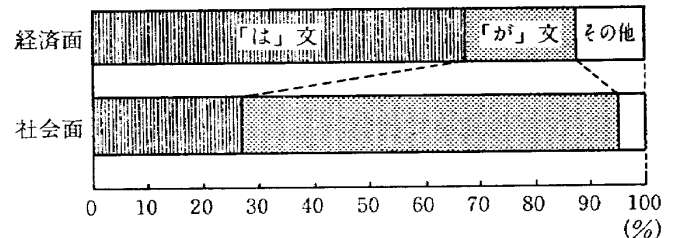


FIG. 1 新聞冒頭文における「は」「が」の使用頻度差

分析を行った全冒頭文数は170文であった。経済面は96文で、内訳は「は」文67（経済面冒頭文中の67.79%）、「が」文19（同19.79%）。その他10（同10.42%）であった。一方、社会面の総文数は74文で、内訳は「は」文20（社会面冒頭文中の27.03%）、「が」文50（同67.54%）、その他4（同5.40%）であった。

これらの配分率について比の差の検定を行ったところ有意な差が得られた ($\chi^2=39.8507, P<0.001$)。全体レベルでの有意差が認められたのでさらにその他を除いて検定を行った結果、経済面・社会面における「は」文と「が」文の比率は0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=38.0779$)。

以上から、新聞記事の冒頭文の形式には違いが認められ、経済面は「は」文の方が、社会面は「が」文の方が多いことが示された。

(2)質的分析

上述の基準で分類された各カテゴリーについて、その質的特徴をまとめた (TABLE 5)。経済面に多かった「は」文は、ある語句・事柄を取り上げてそれについてどうであるかを述べる形であった。たとえば、「政府・日銀は—どうするのか—公定歩合を0.5%引き下げる」という文であった。一方、社会面に多かった「が」文は、突発性や意外性のある事件を伝えるべく、一体誰が何をするのか、いつ何が起こるのかわからないという様相を呈していた。また、「は」文・「が」文の各々について両紙面の特徴を比較すると、類似性が見てとれよう。

TABLE 5 各カテゴリー別の冒頭文の特徴

紙面	「は」文	「が」文
経済面	政府・銀行・企業などを「は」で承けてそれらがどのような経済展開を示すかを述べたもの	経済界のこぼれ話の性質をもったものや意外性・発見の驚きを表わすもの
社会面	警察・裁判所・政府機関などを「は」で承け、それらがどのような判断・情勢を示すかを述べたもの	突発的な事故や犯罪、意外性ある事件や発見の驚きを表わすもの。住所・年齢まで添えた市民の名などを「が」で承ける

追調査

〈目的〉 先の新聞分析調査結果が偶然性 (たとえば、記者に特有の文章のスタイル) を越えた普遍的性質をもつ結果であるか、再現性を確認すべく同様の調査をもう1度別の日付の新聞記事で行う。

〈方法〉 材料は先の調査と同様に、X新聞・Y新聞・Z新聞の三紙における1984年11月30日付朝刊の経済面と社会面のすべての記事の冒頭文を用いる。紙面別のページ対応は前回と同様である。手続・分析基準についても前回と同様に行う。

〈結果〉 追調査においても同様の分析を行い、次のような値を得た。全冒頭文数は146文であった。経済面は90文で、内訳は「は」文63.5 (経済面冒頭文中の70.56%)、「が」文21.5 (同23.89%)、その他10 (同11.11%)であった。一方、社会面での総数は56文で、内訳は「は」文14 (社会面冒頭文中の25.00%)、「が」文35 (同62.50%)、その他7 (同12.50%)であった。

比の差の検定を行ったところ、まず全体に関して有意差が認められた ($\chi^2=28.7212$, $P<0.001$) ので、その他を除いた比較を行い、有意な差が得られた ($\chi^2=27.1882$, $P<0.001$)。

以上から、新聞記事の冒頭文において、経済面は「は」文の方が・社会面は「が」文の方が多いという結果の再現性が確認できた。

考察

新聞記事の経済面・社会面における冒頭文形式の違いが有意差を示し、追調査においても同様の結果が得られたことから再現性が確認され、ここでの新聞分析結果が1度限りの偶然性を越えた普遍的な性質をもつことが示された。したがって、新聞記事の経済面の冒頭文では助詞「は」が多く、社会面の冒頭文では助詞「が」が多く使われることが示唆された。

新聞記事の紙面の違いによってその冒頭文における助詞「は」と「が」の使用頻度が異なるのは何によるのであろうか。本稿では、助詞「は」と「が」について発話者の心的態度の違いから使い分けを仮定した。この仮説を新聞記事に適用すると次のようになる。すなわち、取り出した語句について「それはどうなのか」を述べるべきなのは、突発的な事件を扱う場合よりも経済情勢がいかに変動するかを扱う場合の方が適している。逆に、ある語句を特に取り上げて強調すべきなのは、「何が起きたのか・誰が引き起こしたのか」が重要な場合にこそ必要である。それゆえ、経済情勢の変動を報道する経済面には助詞「は」が多く使われたであろうし、また、「何が・誰が」の話題性を追う社会面には助詞「が」が多く使われたのであろう。

このことは質的分析からも明らかにされよう。経済面「は」文は、政府・銀行・企業などを取り立てたうえで「それがどうなのか」の部分、すなわちそれらが展開する新たな動静を述べているし、社会面「が」文は突発的な事故や犯罪、意外性ある出来事や発見の驚きに関して助詞「が」を用いることでその主体の存在を強く打ち出している。他方、少数派であるが、経済面「が」文と社会面「は」文からも示唆が得られる。すなわち、経済面「が」文では経済界のこぼれ話的性質を持つ、意外性や発見の驚きを表わそうとした記事であった。「〇〇会社だけが」とか「△△会社までが」のニュアンスを込めて、ある語句・会社名自体がニュースバリューを持つ記事であるため、助詞「が」が使われた、と考えられる。一方、社会面「は」文において助詞「は」で取り出した対象は主に警察署・裁判官であったが、話題の中心は警察が行う捜査の進展であり、裁判官の下す判決であろう。ゆえに、「どうするのか」の方に力点が置かれているから助詞「は」が使われることになる。

以上から、新聞記事の紙面による報道の態度や内容によって、冒頭文の「は」と「が」の使用頻度が異なるといえる。それは記事の書き手の力点がどこに置かれているかによる違いと考えられ、心的態度に基づく使い分け仮説が支持されたといえよう。

実 験

目 的

先の調査で既存の文における使い分けルールが成り立つことが確認されたので、今度は使い分けを行うべき状況を設定して「は」と「が」のいずれかを選択させ、合わせてその選択理由を問い、本仮説を検討する。さらに、既知・未知説を含めた新旧情報説の問題点も指摘する。

方 法

〈被験者〉 大学生及び大学院生30名

〈問題文〉 文脈によって力点の置き方が定まるよう作成された8問からなる。「A+{は or が}+B」という形式の文において前半部分Aに力点を置くべき文脈を持つ文と後半部分Bに力点を置くべき文脈を持つ文とが4問ずつ、また、助詞で承ける語句が既知のものと未知のもの4問ずつを組み合わせる。TABLE 6 に問題文を示す。

TABLE 6 実験の問題文

承ける語	文脈	
	前半力点の文脈	後半力点の文脈
旧情報	<ul style="list-style-type: none"> これから私の1日のうちで最も楽しみな話を話そう。会社から家に戻り風呂あがりの冷たいビールをいっきに飲み干す。これ{は・が}私の楽しみだ。 こうじ君の家ではお母さんのからだの調子が良くないので、こうじ君と姉のゆう子さんと家事を手伝っている。夕食後の後片付けはこうじ君 {は・が}やる。 	<ul style="list-style-type: none"> 私が入院してから、はや2週間になる。しかし見舞いに来てくれたのは太郎君だけだ。太郎君 {は・が} 私の好物のメロンを持って来てくれた。 知人に偶然出会い、「しばらく御沙汰していましたが、娘さんは今どうしていますか。」と尋ねられ、「娘 {は・が} 大学に通っています。」と答えた。
新情報	<ul style="list-style-type: none"> 高校時代の友人の結婚式に招待された。華やかによそおっていきたいと思うので真っ赤なドレス {は・が} ほし。 「一体、誰がおじいさんの植木ばちを割ってしまったの。」と尋ねられたので、「まさお君 {は・が} 割ってしまったんです。」と言った。 	<ul style="list-style-type: none"> 行介 {は・が} いつもの停留所でおりました。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。 静かな朝である。起きるとすぐいつものように雨戸を開けた。すると、外 {は・が} 一面の大雪であった。私は思いがけない雪に驚いた。

〈手続〉 まず、教示と問題文が印刷された質問紙を被験者に配った。問題文中の助詞「は」ないし「が」が入る箇所を未決定状態にしておき、文脈に合う適切な表現になると思われる方の助詞を選択させた。さらに、各問題文の下に設けた空欄にその選択理由を自由記述で書か

せた。時間は制限しなかった。

〈選択理由の分析基準〉 予備調査において多くみられた反応をもとに6カテゴリーを設定し、筆者を含めた3名の判定者が独立に分類した。それをつき合わせて2名以上が一致した場合を採用し、3名とも異なった場合には合議によって決定した。なお、一致率は3名全員78.54%、2名以上91.50%であった。合議による新たなカテゴリーを加え、7カテゴリーに改めたものをTABLE 7に示す。

TABLE 7 選択理由の型

型	選 択 理 由
A型	「が」は助詞の前に、「は」は助詞の後に力点(⇒本仮説)
A'型	「が」だけが強調を表わし、「は」は平静
B型	「が」は未知・新情報、「は」は既知・旧情報
C型	慣用的表現
D型	感覚的
E型	その他
F型	無回答・説明不能

選択理由の具体例は次のとおりである。

A型 (1. 「が」とした方が『これこそが』という意味で強調されるから、(2. 「が」にすると前半の方に重点がいつてしまう、ここでは後半の方が重要だから

A'型 他に人がいるわけではないから、取りたてて強調する理由はないから「は」となる

B型 前の問いの文で既に話題になっているから「は」にした

C型 「は」ときかえたら「は」と答えるものだ

D型 (1. その方がしっくりするから (2. 感覚的に自然だから

E型 (上記以外の様々な回答)

F型 よく説明できません

結 果

(1)助詞の選択

「は」・「が」のいずれを選択したかをTABLE 8に示す。力点を導く文脈と選択回答との間の連関は0.9753であり、承ける語の新旧と回答との間の連関は-0.0083であった。

TABLE 8 問題文条件の違いによる助詞の選択

助詞の回答	文脈		前半力点の文脈	
	承ける語	後半力点の文脈	旧情報	新情報
「は」			58	59
「が」			2	1
			60	60

このことから、後半力点の文脈では「は」が、前半力点の文脈では「が」が選択されていることが示された。また、助詞が承ける語の情報の新旧に関わりなく助詞選

択がなされていることが示された。

(2) 選択理由

分析基準に従って選択理由を分類した結果、TABLE 9 および FIG. 2 を得た。ただし、後半力点文脈の問題において「は」ではなく「が」と回答したものの理由は含まれていない。

TABLE 9 問題文条件別の選択理由型の回答数

分類型	回答 承ける語	「は」			「が」			計
		旧	新	小計	旧	新	小計	
A 型		22	16	38	50	28	78	126
A' 型		7	13	20	0	0	0	20
B 型		16	4	20	0	6	6	26
C 型		9	2	11	3	4	7	18
D 型		10	13	23	7	5	12	35
E 型		0	10	10	0	9	9	19
F 型		0	2	2	0	1	1	3
計		64	60	124	60	63	123	247

(注) 合計が被験者数と一致しないのはひとりで複数の型に該当する回答をした場合があったためである。

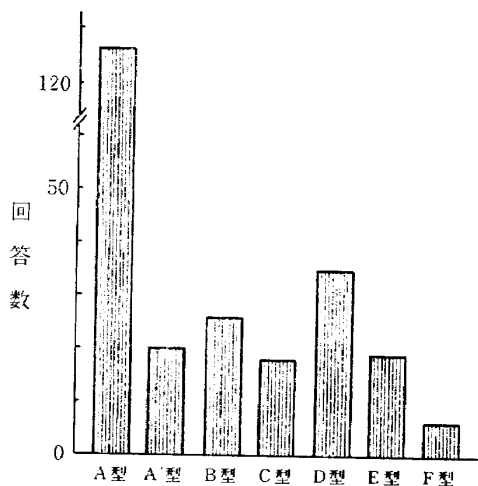


FIG. 2 選択理由型別の回答頻度

選択理由型別の回答数についての比の差の検定を行い、0.1%水準で有意差が認められた ($\chi^2=287.69$) ので、さらに A 型について対間比較したところ $A型 > A' \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E \cdot F$ すべての間で 1%水準で有意となった。A 型以外の分類型間では $A' \cdot B \cdot C \cdot D > F$ 各対が 1%水準で、 $D > C \cdot E$ 各対が 5%水準で有意となり、他はみられなかった。これにより、A 型の最優位とそれに次ぐ D 型の多さが示された。すなわち、本説である力点の置き方説が最優位であり、感覚的な回答も多いことが認められた。

次に、「は」回答群と「が」回答群を比較し、全体の差が有意 ($\chi^2=52.10, P < 0.001$) であったので、各々の回答群内の検定を行った。

まず、「は」回答群内では、 $A > C \cdot E \cdot F, A' \cdot B >$

$F, D > F$ が 1%水準、 $A > A' \cdot B \cdot D, D > C \cdot E > F$ が 5%水準で有意であった。さらに A 型と A' 型を合わせ $A + A' > B \cdot C \cdot D \cdot E \cdot F$ 各対間で 1%水準の有意差を示した。

「が」回答群内では、 $A > A' \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E \cdot F$ が 0.1%水準で有意となり、他は無回答の F 型との間で $D > F$ が 1%水準、 $E \cdot C > F$ が 5%水準で有意差を示すだけであった。これにより、「が」回答群における A 型の圧倒的優位が見出された。

「は」回答群と「が」回答群とを比較すると、A 型では「が」回答群の方が、A' 型と B 型では「は」回答群の方が有意に多く (各々 1%水準)、D 型では「は」回答群の方が 5%水準で多いことが有意になった。

(3) サブカテゴリー

ここまではすべての問題文に共通となる理由型について検討してきたが、ある問題文にだけ数例見られる共通な選択理由があったのでまとめておく (TABLE 10)。

TABLE 10 選択理由のサブカテゴリー

問【題	選 択 理 由
前半力点 で 新【情報	①文法的理由 (例) 主語ではなく目的語だから「は」は使わない
	②「は」の対比的ニュアンス (例) 「は」にするとこれは欲しいが他は欲しくないと感じる
後半力点 で 新【情報	最初の文だから・初めてだから「は」 (例) この話はこの文から始まっているように見えるから

(4) 別回答*の選択理由

予測に反して後半力点文脈の問題文において 3 名が「が」と回答した。いずれの回答も「が」の強調的ニュアンスが述べられていた。

考 察

助詞選択結果より、助詞で分けられた文の後半部分に力点を置くべき文脈においては「は」が、前半部分に力点を置くべき文脈においては「が」が選択されることが示された。また、承ける語の情報の新旧に関わりなく助詞が選択されることが示された。すなわち、「は」と「が」の選択の拠り所は承ける語の新旧ではなく、文脈で示された力点の置き方であることが示唆された。すなわち、研究史からの予想 3・4 を検証し得た。このことから、本稿の使い分け仮説が支持されたといえる。

それを裏づけるべく選択理由の分析も行い、本稿使い分け仮説に相当する選択理由の A 型が他の理由型よりも有意に多かったことが認められた。選択の際の理由から

* こちらの意図したもの以外の回答を、別回答とする。

も使い分け仮説が支持されたといえよう。

助詞が承ける語に関して、未知・新情報であっても「は」で承けたり、既知・旧情報であっても「が」で承ける場合があるのは、結果から明らかである。TABLE 10の選択理由サブカテゴリーに「最初の文だから・初めての語だから『は』となる」との回答が7例あり、「は」は既知の旧情報を承けるとする説の反証となるだろう。「は」を旧情報のマーカー「が」を新情報のマーカーとする考え方では説明できない事態を示すことができた。すなわち、「は」と「が」の使い分けに関する新旧情報説の不備を指摘することができた。

それでは、新旧情報説で説明できない事態はどのように考えれば説明可能になるであろうか。本実験で支持された力点の置き方説に従えば次のように考えることができる。既知の語句を承けていてもそれを強調し力点を置くのであれば「が」を使い、未知の語句を承けていても後半部分の方に力点を置くのであれば「は」を使う、と説明し得る。したがって、力点の置き方説が新旧情報説の不備を補えるといえよう。

次に、選択理由について考察する。選択理由を問うことによって、どのような使い分けルールに従ったのか検討し得る。先に述べたように、A型すなわち力点の置き方説に従った選択が最優位であることが示唆された。

また、A'型すなわち「『が』だけが強調を表わし、『は』は平静」とするルールの存在が確認されたが、これを先の諸説概括の際にみた「『は』は取り立て・『が』は単なる叙述」の説と比較すると正反対の見解であることが見て取れよう。したがって、A'型の存在が松下以下の説の反例となったことが示唆され、先の予想2が検証されたといえる。

「は」選択時と「が」選択時とを比較してみると、その選択理由の分類型の出現度合が異なっていた。「が」の時は圧倒的に取り立てや強調を理由にしており、他の理由はほとんど見られなかった。また、別回答となったものすべてが「が」であり、それは強調を意識し過ぎてしまったことによると思われる。それに対して、「は」の時はA型が多いことに加え、A'型・B型そして何よりもD型が見られた。すなわち、本稿の力点の置き方説の優位に次いで、「『は』の方がしっくりいくから」「自然に感じられるから」などの感覚的回答も多かったことである。このことは「が」よりも「は」の方が選択の理由づけが難しいことを示唆しているといえよう。

また、A'型は「は」選択時にのみ見られた型であり、すなわち、「が」のような強調は行わない、という消極的な「は」選択である。しかし、A'型は本稿における

使い分け仮説を否定するものではない。なぜなら、「『は』は後半部分の方に力点がある」ということを前半部分に注目して言い換えれば、「『は』は前半部分の方には力点を置かない」ことになるからである。「が」は前半部分すなわち「が」で承ける語自体に取り立てを与えて力点を置くのであるから、後半力点の「は」が前半にかける力具合は「が」のそれとは比べものにならないであろう。また、助詞で承ける語を強調するか否かという前半部分に注目した理由づけであって、後半部分をどう扱うかまでは言及していないだけである、とも考え得る。以上のことから、前半部分に力点がないと言われることで、暗に後半への力点の存在が示唆されるのではないか。したがって、A'型も本仮説を支持しているといえるのではあるまいか。

母国語として無自覚に行っている使い分けを意識化させることは難しく、「は」と「が」の選択理由を自由記述してもらうことには限界があると思われた。今後はよりよい引き出し方を検討すべきであろう。

特に「は」の方を選択する際の理由づけの難しさが示唆されたが、「は」と「が」の使い分けの問題は「は」の捉え方の難しさによるのかもしれない。TABLE 10からわかるように、サブカテゴリーとして分類されたのは、「は」をいかに捉えるかを中心にした回答であった。「『は』は主語だけを表わす」との考えから文法的理由を導いた回答は三上(1960)が批判する日本語の主語の認定の問題と関わるであろうし、「『は』は対比的ニュアンス」としてまとめられた回答は久野(1973)の機能論に結びつけられよう。このように、「は」は様々な解釈がなされ得る、把握の難しい助詞である。したがって、発話者の心的態度という観点からさらに研究を進めるべき課題であると思われる。

全体考察

本稿では、日本語学習者にとって困難とされる助詞「は」と「が」の使い分け方を探り、その法則の定式化を試みた。研究史から4項目の予想が導かれ、それらを包括し得るように語用論的観点に立って、発話者の心的態度から捉えた力点の置き方説を仮定し、2つの研究によって仮説を検討した。まず、既存文の分析を行うべく新聞記事冒頭文を対象に調査した結果、ニュース領域の違いによって書き手の報道の際の心的態度すなわち力点の置き方が異なるために使い分けられる、と示唆された。質的分析からも同様の示唆が得られた。次に、文脈によって力点を置く箇所が定まるような材料を用いた実験状況下で使い分けを検討したところ、本仮説を支持で

きた。また、未知・新情報であっても「は」を選択したり、既知・旧情報であっても「が」を選択することが示され、既知・未知説および新旧情報説の不備が指摘できた。新旧情報説で説明できない事態も力点の置き方説ならば説明可能であり、本説の有効性が示唆された。すなわち、既知の語句であってもそれに力点を置くのであれば「が」が使われ、未知の語句であってもその語句に関する叙述に力点を置くのであれば「は」が使われると説明できよう。また、選択理由の分析において、本仮説に相当する理由型が最優位であったことから本説が支持された。ただし、無自覚のうちに行っている使い分けを意識化することの難しさも指摘され、今後の検討を要することとなった。

以上のことから、既存文においても実験的状況においても、「は」と「が」の使い分けは発話者の心的態度——力点の置き方——によることが示唆され、所期の目的は達成された。また、新旧情報説では説明できない事態を指摘し、それをも説明し得る概念として力点の置き方説が認められたといえる。

検証された使い分けルールは、従来、国語学で述べられていた文法術語中心の観点とは異なり、文表現とその使用者の関係という実践的な語用論的立場にある。使用者である発話者・書き手がいかなる心的態度で表現するかを重んじる観点である。したがって、術語中心ではなくルールとして覚えられ、かつ実際的であるため、外国人日本語学習者に役立つと思われる。係助詞と格助詞との違いという文法術語による説明では実生活に役立ちにくいので、日本語教育においては、その対極にあるとも言える場面状況暗記の方法に頼りがちかもしれない。だが、場面による丸暗記だけでは実際の多様な状況変化に対応できず、適切な表現が使われにくいのではあるまいか。まず原則として基本的な使い分けルールを提示したうえで、場面状況の学習に発展させれば、よりよく身につくであろう。本稿の使い分けルールが日本語教育に役立てられよう。

ところで、近年、文の視点ということが聞かれるようになったが、本稿の説もある意味で視点とも言えよう。ただし、言われるところの文の視点(久野, 1978)は文中の登場人物の目を考えた視点だが、本稿の説はあくまで

も発話者自身の目としての視点であることを述べておく。

今後の課題は、力点の置き方による「は」と「が」の使い分けルールの活用性を検討すべく、日本語教育の場で実験を行うことが必要であろう。たとえば、力点ルールを教えた群と他の説明を行った群とを比較して、教授後の使い分け誤答の減少を検討することが考えられよう。また、新旧情報と初出・既出との把握についても検討する必要がある。

引用文献

- Chafe, W. L. 1970 *Meaning and the structure of language*. Chicago: University of Chicago Press.
 青木晴夫(訳) 意味と言語構造 大修館書店
 服部四郎・大野 晋・阪倉篤義・松村 明(編) 1978
 日本の言語学, 3 文法 I 大修館書店
 林部英雄 1983 文における新—旧情報の弁別に関する
 発達の研究 心理学研究, 54, 135—138.
 井上和子 1983 文・文法と談話文法の接点 言語研究,
 84, 17—44.
 川本茂雄 1976 ことばとところ 岩波書店
 久野 暉 1973 日本文法研究 大修館書店
 久野 暉 1978 談話の文法 大修館書店
 松村 明 1942 主格表現における助詞「が」と「は」
 の問題 国語学振興会(編) 現代日本語の研究 白
 水社 p. 385—408.
 松下大三郎 1930 標準日本口語法 中文館書店
 三上 章 1960 象は鼻が長い くろしお出版
 三尾 砂 1948 国語法文章論 三省堂
 永野 賢 1970 伝達論にもとづく日本語文法の研究
 東京堂出版
 大野 晋 1978 日本語の文法を考える 岩波書店
 佐久間鼎 1940 現代日本語法の研究 厚生閣
 田原俊司・伊藤武彦 1985 助詞ハとガの談話機能の発
 達 心理学研究, 56, 208—214.

付 記

本稿を作成するにあたり、御指導賜りましたお茶の水女子大学・藤永保教授、内田伸子助教授に深く感謝いたします。(1986年9月29日受稿)